文科三年　稲垣のぶ

都より歸りし姉も今朝はいにて秋かぜたちぬ故郷の家

山はみな雲に眠れる曉の秋の海こそかなしかりけれ　池邊よし江

新墓の土の香おくる秋風にそでの露ちる青山のはら　初鹿野とみ

一人きて古沼にうつる十月の雲のゆきかひ見るがかなしさ

秋の夜はみ濠の水に灯をなげて電車のゆくも淋しかりけり

秋風に楡の葉ちらむ北國のまどに書よむきみが顏みゆ　本田よしえ

柿の木にあけの月みえうす白きひかり浮かべる山の井の水

北の海のほしいまゝなる秋かぜにくろき波みるたゞひとりかな　土肥長惠

うちめぐる時計の針はほそけれど世の人みなをうとかしにけり　千野てふ

あすはわれ旅にゆくなり秋風はよきて吹かなむ父母の家

風ふけば栗の實は落ち妹は早起すらむ家のこひしも　小谷信子

夕霧に林も星もつゝまれぬたゞ一すぢの水は白くて　尾臺はる

妹をよろこばせむと萩の上の蜻蛉ねらへば秋風の吹く　岡田いし

風ふけばかすけき音し散りしける落葉の踊る午後の秋山　岡本節

秋寒き柚山川の水の音ねざめせさすな老いし父母　金田まき

ポプラーの葉すれ枝すれさや〳〵と秋のかぜふく新開の街　田邊馨

きぬた打つ母にたはれて遊ぶ子のつけ紐に吹く秋のはつかぜ　田中やす

山畑の茄子の枯葉をうちならしかなしき秋のかぜ渡るなり

この夏は家さへ田さへ流してき秋の河原のひとすぢの水　相馬芳枝

コスモスに秋風吹けば湯の宿に病めるひとりの友をしぞおもふ

摘みて來し秋の艸花投げ入れつつれなきまでにすめる小川に　中原伊久野

この秋を君に習ひて歌はむとたのみしものを待てりしものを　内田ゆき

無花果の葉末ふるはせ夕かぜのふくが悲しきあきともなりぬ

戸をくればくりやの水に有明の月さむくさす秋のふるさと　大澤きみよ

あしの花ま白にさける大川の堤ひたしてゆく秋の水

秋あさきみ空の雲の夕照に背戸の川水うすあかりする

秋ばれや小萩の風をなつかしみふかれにいでし黑髪の人　山内きい

野の流れ野菊の花の二つみつ浮びて秋の日はくれにけり

秋草の花の淋しくみだれたる夕風のなかにうた思ふひと　山野すみれ

煙なす霧の中より歌ひゝき船みえてきぬ人みえてきぬ

紅葉せる岡の林に秋くればそらねする風葉をならす風

柳下三巳

朝まだき魚あきうどの競ひゆく海へのみちに秋風のふく　前島美子

秋の海靜かにくろく暮れゆきぬ磯のやかたの火はあかうして　古賀まつよ

ひろく遠く音なく流れゆく水もよの秋なればさびしかりけり　江藤馨

秋風はかなしからずや我を人をこの淋しさになかせては吹く　齋藤たまを

そら豆のかわける殼のからからと鳴るもさびしき夕暮の風　佐々木清

われしらで言ひし言葉のはげしさに人をなかせて我も泣きぬる　師岡ふみよ

暮れてゆく山路をいそぎ下りきてふと見出でたる水のあかるさ　文科一部二年　伊藤梅子

はたはたと弟があけし網ゆれて獲物さはなり秋の江の水　鹽川國

秋風の萩の下露ふきしよりそでの寒くもなりにけるかな　佐々木清

月になく虫の音のせて秋風は家こふ人の袖しぼらする　師岡ふみよ

鏡のこゑさ霧に消えて高山の裾野さびしく秋のかぜふく　文科一部二年　伊藤梅子

石垣にさびしく咲ける秋草の花にたまれる町のちりかな　石川しげ

あふぎ見る御空のほしをよにあらぬ君がひとみとなつかしむかな　石川しげ

かもめとふ小島の磯に島守は夜おと淋しき火をともすかな　石川しげ

靜かなるみ寺の庭に月させばうねり淋しき萩の一むら　石川しげ

うす色の野菊を見れば何となく泪のおつる我となりぬる　富澤美穗子

うた歌へば木だまかすかにひゞきくる秋のまひるの山の道かな　大西しげ

露わびて靜かに辿る野邊のみちすあしつめたく萩の花ちる　大西しげ

ほろ〳〵と椎の實おちて屋根をうつ曉さむき山の家かな　大西しげ

合乘の客たゞ二人ゆふぐれの山こす馬車のつらかりしかな　大西しげ

しづやかに秋のもて來る淋しさを味ふ如したそがれの山　大西しげ

秋は來ぬ我たゞひとりつく〳〵と山みることのおほきこのごろ　大西しげ

まろび來てさと乳色の泡にちる潮黑みて海は暮れゆく　大西しげ

さびれたる岡邊にあかき柿の實のめだちてそゞろ家のこひしき　金谷京

夕されば むらがりて立つ故郷の阿蘇の煙のなつかしきかな　金谷京

こゝろまた淋しくなりぬ夕まぐれはかなくうすき山に向へば　金谷京

傘さして梅雨のあしたを師の家へ共に通ひし姉ぞこひしき　金谷京

たんぽゝの散りのこりたる青草の野にまふ蝶をあはれとぞ見る　金谷京

秋の山落葉あつめて茶をわかすけぶり床しきまひるすぎかな　金谷京

尾花さく山と山との間をば友のる汽車は笛ふきてゆく　金谷京

しらみゆく曉の空の靜けきにあをば音なく風にそよげる　多田しめよ

をちこちの炭やく煙きえはてゝうす紫に山はくれゆく　多田しめよ

うしなひし友をしのびていく夜わが枕ぬらしゝ春はくれゆく　多田しめよ

中村イト

秋をへて咲きのこりたる一本の色なつかしき白菊の花
吹きあれし風靜まりて濱千鳥なきつれわたる有明の空

武藤きよし

白々と月草つゞくのべに來てふとしも汽車のとまりけるかな
はてしなき夜の海原を思ふかな尾花が原を月のてらせば
夜の空にそゝり立つ山くろき山人のる汝は小さかりけり

山田嘉都惠

目しひたる妹もつ身はなか〳〵に春のくるゝがうれしかりけり
故郷にかよふ峠の大榎わか葉しつらむなつかしきかな
母の脊にまさぐりなれしふる里の門の柳もしげりあふらむ
たらちねの形見のきぬの上にのみ心おかるゝさみだれの雨
あさましくさめしこの世をよそに見ていつまでねむる小島なるらむ
まれに來て物うる舟のほかにまた世の事しらぬかのはなれしま
しら〳〵とわびしき汽車の夜はあけて紅葉の山の見え初めしかな

安永みち

夕暮のあめにくもれる汽車の窓悲しや秋の山迫り來る
波の音も漁師の歌もこのおろは涙さそはずなりにけるかな
終に我旅も終りとなりにけりたゞいさゝかのつかれのこして
品川の海に夕の灯のうけばいまをへたりし旅の戀しき
何故の心ともなくながれくる我が涙こそ貴かりけれ
くち惜しきことしてけりな何ごとも知らざりし日はやすけかりしに

齋藤かつ

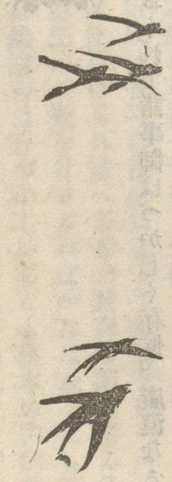
君を思ひ靜かにくるゝ山を見て口ずさむ歌の淋しかりけり
椰子の露雨とこぼるゝあさあけを目の大きなる島少女ゆく
藍の香の身に心地よき袷きて虫はなちやる秋草の庭
蔓草をひけばぼろ〳〵實の落つる秋のみ山の晝の淋しさ
夕もやの淡く木立をつゝむ時ひとみ靜かにうるほひて來ぬ

宮崎晴枝

ものおもふ夕べ夕べはせとにたち涙して見しふるさとの山
わかるゝ日なおりをしみて日暮れまでかたりくらしゝ島の松原

關みさを

秋されば柞のもみぢほろ〳〵と涙の如く落つる佐保山
弟らと裏の小山に柿とれば君ほゝゑみて立ちますものか
佛にと折りし桔梗の花束を妹に似たる子にとらせけり
なよ〳〵とちがやがくれに粟色の小さき灯ともす女郎花かな

文科二部　二年　梶原千代

なき母のそへぢの歌に聞きなして蛙なく夜をひとりねにけり
ゆくあきのかなしみよりもいとちさきほそき聲してきりぎりすなく
いのちより長きさむげのひげふりて葉かげに細くこほろぎがなく
秋かぜがほしいまゝなる聲する日ふとかへりましぬたびにやむ兄